



高知県西部を流れる四万十川は、青く澄んだ清らかな水の流れと川岸の美しさ、更には川漁など川とともに生きる人々が織りなす魅力的な姿から「日本最後の清流」と呼ばれ、流域住民のみならず、全国的に愛されている河川の一つです。しかし、水質の悪化による透明度の低下や植生・魚種の減少、更には人工構造物による生物の生息・生育環境への影響や景観阻害等の課題も抱え、四万十川の自然環境保全と地域振興の共存を図るための流域全体でのユニークな取り組みが数多く実施されています。

例えば、水質の改善に向けては、四万十川方式と呼ばれる本来自然が有する物質循環の自然浄化機能を活かした水処理システムが流域内の各所で導入されています。

また交流・連携を基本としたパートナーシップによる流域保全活動では、四万十川流域を21世紀に向けて守り育て、自然と共生する水系社会を形成することを目的として、平成5（1993）年に「四万十川サミット」が開催され、国・県・流域市町村・住民が一体となった流域再生の取り組みが始まりました。

このほか、四万十川流域の住民が一丸となって地域づくりを推進するための「四万十川流域住民ネットワーク」、四万十川を愛する個人や企業からの募金を集めた「四万十川基金」、四万十川流域での学術に根ざした研究から産学官民活動を展開する「四万十・流域圏学会」など、様々な流域連携活動組織が設立されています。さらに、四万十川流域に育まれた豊かな景観を地域で大切に守り育てていく地道な活動は、平成21（2009）年の国の文化財保護法に基づく重要文化的景観の選定に繋がりました。

平成14（2002）年からは、「ツルの里づくり」「ヤゴの里づくり」「アユの瀬づくり」「アカメの淵づくり」などで構成される「四万十川自然再生事業」がスタートしました。この事業の開始に合わせて地元NPO、漁業関係者、区長会、観光事業者、教育関係者、流域住民団体などで構成される「四万十川自然再生協議会」が発足し、「昭和30年～40年代の四万十川の原風景の保全と再生」を目標に、行政と地域が連携した四万十川再生の取組が進められています。

